



三国中学校だより

【校訓】誠心 自主 創造

— 自ら想像し、考え、行動する生徒の育成—

合言葉：進取果敢



小郡市立三国中学校

第 26 号

令和8年3月17日発行

文責 校長 米倉佳美

第32回卒業証書授与式 巣立ちゆく269名のみなさん、ご卒業おめでとうございます!

3月13日(金)に第32回卒業証書授与式を行いました。卒業生は、この3年間で心も体も逞しく成長し、義務教育9年間の総まとめにふさわしい生徒に成長してくれたことを心から誇りに思います。式歌「河口」は一人ひとりの思いが込められた重厚な歌声で、フィナーレを飾るのにふさわしい合唱でした。また、みなさんと一緒に歌った最後の校歌も立派

でした。来賓の方からも「素晴らしい卒業式でした」など、温かいお言葉をたくさんいただきました。卒業生代表の さんの答辞の一部を紹介します。

冬の寒さも和らぎ、暖かく降り注ぐ日差しに春の訪れを感じる季節となりました。私達卒業生は、今日、この三国中学校を卒業します。

三年前、私達は、期待や不安を胸に三国中学校へ入学してきました。広い校舎に驚き、大きめの制服に身を包み、胸が高鳴ったことを今でも鮮明に覚えています。(中略)

そして三年生。体育大会では、運動が苦手な人も少なくありませんでした。しかし、クラスやブロックで一つの目標に向かって練習を重ねたこと、ブロック関係なく全力で応援したことで仲間との絆が深まり、協力する大切さを実感できました。

次に、文化発表会。私達は「花束～思いを声に 想いを胸に～」のスローガンを掲げました。最初は人前で歌うことに抵抗がある人も多く、意識の差が感じられました。それでも諦めず、スローガン達成に向けて声を出していると、一人、また一人と協力してくれる人が増えていき、学年全体でスローガンを達成しようという雰囲気が強くなりました。合唱練習を通して、私達は、日常の中でも人の良さに気付けるようになり、少しずつ成長することができました。文化発表会当日は、体育館に響き渡る歌声と客席からの温かな拍手、胸の奥で高鳴る鼓動すべてが重なり合い、最高の舞台上でクラスの個性を表現することができました。

この二大行事を通し、学年スローガンである「輝～一人一人がつくる喜びの笑顔あふれる学年～」が達成できたことで、学年の絆はより強固なものとなりました。仲間と共に何かを成し遂げ、得られた自信は、その後の受験の中でも大きな支えとなりました。しかし、新しい挑戦は、簡単なものではありませんでした。

テストの結果が返ってくる度に、憂鬱な気持ちになったこと。勉強しようと思っても、なかなか手が進まなかったこと。自分を責めてしまったことなど苦しい思いもありました。それでも分からない問題を教え合った日々、仲間同士で声を掛け合い臨んだ面接練習、これらの経験は私達を成長させてくれました。そして、いつも応援して下さった先生方や保護者の皆様、共に励まし合った仲間の存在があったからこそ、最後までやりきることができ、改めて受験は団体戦だと実感しました。

こうして思い返してみると、三国中学校で過ごした三年間は、多くの方々の支えがありました。だからこそ、たくさんの思い出が詰まったかけがえのない日々になったと感じています。三国中学校すべての先生方。先生方は、私たちのために優しく、時には厳しくご指導くださいました。先生方の温かいご指導があったからこそ、私達は今日、この場に立つことができたと思います。これまでにかけていただいた数々の言葉は、私たちの心の大きな支えとなりました。これからも、先生方から教わったことを胸に刻み、新たな道を切り開いていきます。

そして15年間、私達を一番近くで見守って下さった保護者の皆様、思い通りにいかないことが辛くて反抗してしまっただけが数えきれないほどあります。それでも、そんな私たちに向き合い、受け止めてくれました。それがとても嬉しくて、家族が心から安心できる存在になっていました。保護者の皆様、毎日疲れているはずなのに、温かいご飯を用意してくれたこと、心身共に支えてくれたこと、本当にありがとうございます。どれも決して当たり前のことではなく、深い愛情であることを改めて実感しています。これからも、きっと迷惑をかけてしまうけれど、私たちの成長を温かく見守ってください。



そして、いつも寄り添ってくれた友達。本気で笑って、本気で悔しがって、本気でぶつかった時間はすべてが宝物です。こんな仲間に出会えたこと、一人では絶対に見られなかった景色をみんなと一緒に見られたこと、それが何よりも誇りです。

これからそれぞれの道へ進みます。不安もあるかもしれませんが、三国中学校で過ごした三年間が、きっと私たちの背中を押してくれます。中学校で培った経験を力に、私達はいよいよ新たな道へと歩み出す時を迎えました。三年間の喜びも悔しさも、すべてが私たちの糧となります。先生方、仲間との別れはとても寂しいですが、この思い出や経験を糧に、希望に満ちた未来へ突き進んでいきます。

最後になりますが、三国中学校の更なる発展と、皆様のご活躍をお祈り申し上げまして、答辞とさせていただきます。

令和八年三月十三日 卒業生代表

「第32回卒業証書授与式」校長式辞

先日、卒業アルバムを拝見しながら、みなさんの学びの軌跡をたどってみました。

3年前、中学校の制服に袖を通し、わくわくした気持ちと少しばかりの不安を胸に入学してきたみなさんが、こんなにも立派に、心も体も逞しく成長できたことに、感慨深い気持ちで胸がいっぱいになりました。

みなさんが入学した令和5年度の4月は、感染症による制限のためマスク着用が日常でした。5月上旬には制限が見直され、ようやく本来の学校生活が戻り始め、友だちの笑顔が見えるようになったり、会話がより弾むようになったり、制限のある環境から、自由な活動が可能になっていく過程を経験したことと思います。そのような経験をも乗り越えたからこそ、状況に応じて柔軟に行動する力や、互いを思いやる心を身につけることができたのだと思います。

また、今日の平和の尊さを学ぶために、大刀洗平和記念館や戦跡を巡ったフィールドワーク。歴史や文化に触れ、仲間と協力しながら集団の一員として責任を果たすことの大切さを学んだ修学旅行。そして、スローガン「UNI～仲間と共に咲き誇れ～」のもと、心を一つに取り組み、積極的に挑戦することのよさを実感できた体育大会。また、「花束～思いを声に 想いを胸に～」のもと、味わい深い展示作品や、聴いている人の記憶に残る合唱を創り上げた文化発表会。それら一つ一つの確かな軌跡が、みなさん一人ひとりを大きく成長させ、後輩のよき手本となる姿へとつながり、脈々と受け継がれていく三国中学校の伝統と誇りを築き上げてくれました。

あの日の初々しい表情が、今では凛とした眼差しへと変わり、仲間とともに歩んできた日々の積み重ねが、みなさん一人ひとりを大きく成長させてくれたのだと実感しています。

さて、2月に開催されたミラノ・コルティナオリンピックで、フィギュアスケート・ペアの三浦璃来さんと木原龍一さん、通称「りく・りゅう」ペアが金メダルを獲得し、日本中に大きな感動を与えてくれました。しかし、その快挙は決して順風満帆な道のりの先にあったものではありません。

三浦選手は幼い頃からスケートに魅了され、努力を積み重ねてきました。木原選手は何度も挫折を経験し、競技を続ける意味を見失いかけた時期もありました。異なるキャリアを歩んできた二人は、2019年夏、人生を変える運命のような出会いを迎えます。初めてペアを組んだその瞬間、「雷が落ちた」と感じるほどの相性を見出し、新たな挑戦が始まりました。

しかし、そこからも困難は続きます。コロナ禍による練習の制限、ペアならではの練習中のケガや、精神的なプレッシャーとも向き合う必要がありました。それでも二人は、コーチや家族などの支えを力に変え、前を向き続けました。

オリンピックのショートプログラムで予期せぬミスが響き、5位に沈んだときも、木原選手は「もう大丈夫、強い自分に戻った」と三浦選手に宣言し、二人は見事に逆転のフリー演技を成功させました。あの金メダルは、奇跡ではなく、日々の努力と信頼の積み重ねが生んだ結果でした。

卒業生のみなさん。みなさんのこれからの道のりにも、思い通りにいかない日があるかもしれません。挑戦の途中で迷うことも、壁にぶつかることもあるでしょう。しかし、「りく・りゅう」の二人がそうであったように、みなさんにも支えてくれる仲間がいます。みなさんを信じて見守る家族がいます。努力はすぐに形にならなくても、続けることで必ず道が開けます。

今日巣立っていくみなさんが、自分の可能性を信じ、人との出会いやチャンスを進取果敢、自らの手でしっかりとつかみ、未来が、金メダルのようにキラキラと、希望と幸せに満ちたものでありますよう心から願っています。

